

しらかべ



2018年3月19日 人権・同和教育部発行

春暖の候、保護者の皆さま方におかれましてはご健勝のことと存じます。今年度も本校の人権・同和教育にご理解とご協力をいただき厚くお礼申し上げます。そして、「しらかべ」をお読みいただいた感想や本校の人権・同和教育の取り組みについてのご意見などについて、懇談などで返信いただき、ありがとうございました。来年度も変わらぬご理解とご協力をよろしくお願いいたします。



✦ 踏み出す一歩～本校生の読書感想文より（一部抜粋）～

書道部員として障害福祉サービス事務所「野の花」の夏祭りイベントで、書道パフォーマンスをした。誰もが笑顔で対応してくれて、とても楽しい時間を過ごす中で、自分が勝手にイメージしていた障がい者と、訪れるお客さんに笑顔で対応している人たちはまるで逆だった。帰宅して、家族に夏祭りの話をしたとき、正直に感じたそのギャップを打ち明けた。話を聞いた母は、「お母さんに障がいのある子が生まれたとして、お金をたくさん残してあげても何かが違うと思う。やっぱりその子なりの自立をしてほしいかな。野の花みたいに自分のできることで働ける施設があったらいいな・・・」と話し始めた。その中で私がハッとした言葉、それは「自立」という言葉だった。

そういう思いで私が手に取った本が『虹色のチョーク』だ。この本の舞台は、日本理化学工業株式会社。ガラスやホワイトボードなどツルツルした素材に書くことができる筆記用具「キットパス」を製造している。作業員のほとんどは知的障がいがある方で、その半数近くは重度の障がいがある。そんな方たちの家族の思いが綴られた章の中で、あるお母さんの言葉に引きこまれた。「自分の子どもに障がいがあると知った時の衝撃は、それまでの人生が覆るほどのものです。どうして何故と泣いて過ごし、それを繰り返しました。しかし、泣いても現実は何も変わらない。子は生きていて成長するのだから」と気づいたという。お母さんは「知的障がいのある長男のことで次男に負担をかけまいと決めている」と語り、「私が死んでしまった後、一人でどうやって生きていくのだろうと心配です」とも言っている。「何とか一人で自立して生きていける方法を考えていきたい」と決意している。私の母の話と全く同じだ。子どものことを大切に思うお母さんならみんな同じように考えるのかもしれない。この本では昨年7月に起こった「津久見やまゆり園」のことも触れられていた。その犯人の言葉の中に「障がい者なんていなくなればいい」とあった。しかし、障がいがある方は周りの人を不幸にしたり、一方的にお世話されるだけの存在ではないのではないか。私の祖母は足が不自由で、外出する時も車いすを使う。買い物に行くときも車いすで、その日は私と母が一緒だった。買い物を終え、車に乗ろうと立ち上がった祖母を支える母がよろけ、祖母が母を支えた。「あれ、今、なんか逆よね。」とみんなで笑った。きっとこういうことなのだと思う。障がい者を助けていると思っても、逆に支えられていることもたくさんあるのだと。日本理化学工業株式会社の外観は、まるで大きなキャンパスのように、虹色の線をいくつも重ね、花や昆虫や星や雲や人の顔を描き出しており、三階の窓の隅々まで広がる色彩に心を奪われるという。外観のイメージそのままに、そこで働く人たちは、みんな生き生きと輝いていた。私が出会った「野の花」の人たちを思い出す。働くことで社会とつながる喜び、責任を持って仕事を成し遂げることで感じる達成感や自分への誇らしさ。障がいの有無に関わらず、誰もが求めるものではないだろうか。しかし、健常者なら当たり前のようによく求め、手にすることができるものでも、障がいのある人にはそうでないのも現実なのだ。だからこそ、「野の花」や「日本理化学工業株式会社」のような場所が必要なのだろう。今回、「野の花」へ行き、直接触れ合うことを通して、障がいがある人について以前より

は少しだけ理解を深めることができた。また、関心を持って本を読んだ。障がいがある方だけでなく、ご家族の思いにも触れ、さまざまなことを感じた。自分のこれまでの偏見を恥じ、知ることの大切さを改めて感じることができた。誰もが自分らしく生き生きと生きられる社会の実現のための第一歩は知ることである。この一歩は小さいけれど、大切な一歩として進んでいきたい。

【2年生3学期の取り組み ～高松差別裁判事件・人権クロスロード～】

2年生は3学期、二本柱で学習を進めました。1月17日には、1933年に起こった高松差別裁判事件から、結婚差別について学びました。憲法14条の制定など、大きく社会に及ぼした影響や歴史を知るという意味について学びました。また、1月24日には、各クラスで人権クロスロードを実施しました。クロスロードとは、「岐路・分かれ道」を意味します。私たちの日常では、ジレンマを伴う決断を迫られる場面が多々あります。そのようなさまざまな状況を想定し、YES・NOの二択で自分の行動を決定し、その理由を示す、カードゲームの一種です。クロスロードで生徒が取り組んだ問題を紹介します。

☆ あなたは高校生です。電車の駅前でバスを待っていたところ、高齢者の乗る車いすを介助して階段を昇る二人の女性を見かけました。かなり重そうです。そこにちょうど自分の待っていたバスが来ました。

→あなたは介助に YES 加わる or NO 加わらない

☆ あなたは不動産会社の社員です。お客様から「同和地区以外の物件を教えてください」と依頼されました。 → あなたは同和地区以外の物件を 教える or 教えない

生徒の間では活発に意見の交換がされていました。級友との話し合いを通じて得るものは多かったようです。

以下に生徒が書いた感想（一部抜粋）を紹介したいと思います。

▶自分と違う意見があるという当たり前のことを認識できました。考えかたの違いを受け入れ、理解することは異文化理解にもつながると思うので、とても大切だと思いました。また、自分と違う考え方をマイナスな感情でとらえるのではなく、プラスの感情でとらえることが大事だと思いました。

▶友達の考えはすごく新鮮で、自分と同じ考えでも違う考えでも聞いていてすごく面白かったです。同じNOを選んでいたのに、理由が全く違っていても面白かったです。友達と話すことは本当に楽しくて、お互いの違う考えを素直に受け入れることができました。こんな感じの雰囲気になったら、現実的に差別はなくなると思いました。

1年間の学習を通して印象に残っていることや、学んだことについての感想も、抜粋して紹介します。

▶学んだことはたくさんありますが、この学んだことを日常生活で生かすことができこそ身についたと思います。ただ知識として頭の中にあるだけでなく、行動でも示したいと思います。差別は自分と遠い存在ではなく、身近にあると学びました。

▶差別というものは他人事ではなくて、僕たちみんなが差別心を持っているということなので、自分たち一人ひとりが自分の差別心と向き合い、差別をなくしていけるようにしていきたい。

「知識」として学んできた人権を「自分自身の問題」として積極的に考えることができ、また自分とは異なる意見・価値観の存在への気付きもあったようです。

3年生では、就職・結婚差別の事例から、差別解消に向けての考え方や生き方を見つめます。